
MI・ZU・HA

ル・ルー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MI・ZU・HA

【Nコード】

N4313W

【作者名】

ル・ルー

【あらすじ】

町のはずれの古い神社で、瑞葉は不思議な少年と出会う。「女神の国へ帰ろう」少年の手を振り切って駆け出した瑞葉がたどりついたのは、まだ神々がこの地にいた頃の日本だった。——神代の時代から連綿と続く、忘れられても消えることのない物語。

神隠し 1

洗濯と部屋の掃除をすませると、瑞葉は部屋着からシャツとジーンズに着替えて家を出た。空は気持ちのいい五月晴れで、近くの公園からは小学生たちの遊ぶ声が聞こえてくる。

今日は日曜日だ。

瑞葉はアルバイトの面接を受けるために、大学のそばにある喫茶店へと向かった。

瑞葉はこの春大学に入学し、念願のひとり暮らしを始めた。家族と離れて初めてひとりで眠った夜はさすがにさびしく感じたが、新しい生活に慣れるのに必死になっている間に一か月が過ぎ、今では大学に友人もできてそれなりに楽しくやっている。

面接先の喫茶店は瑞葉が通う大学の近くにあるのだが、大通りからはずれた細い道を入ったところにあるため意外と学生たちには知られていない。

レトロな雰囲気その店は瑞葉より少し年上の若い夫婦が経営していて、店内に飾られている置物を始め使われているティーカップや食器にまで彼らのこだわりが感じられた。瑞葉はまるで骨董品かのような食器で奥さん自慢のチーズケーキを食べるのが好きだった。そして先日、店主の旦那さんにアルバイトとして雇ってもらえな

いか頼みこみ、今日面接をしてもらう約束を取り付けたのだった。張り切りすぎたのか、店に着いたのは約束の時間より三十分以上も前だった。

（どうしようかな、いくらなんでも早すぎるよね）

何気なく辺りを見渡すと、道の突き当たりに鳥居が見えた。

（こんなところに神社なんてあったかな。ま、いいか。面接の時間まで少し時間があるし、お参りしていこう）

何度かこの喫茶店に来ているにも関わらず今まで神社の存在に気がつかなかったことを不思議に思ったが、瑞葉はその神社へ参るこ

とにした。

その神社は丹羽神社というらしく、瑞葉のほかにも何人かの参拝客がいた。拝殿へ参ったあと、境内の景色を見ながら瑞葉は参道を戻った。

手水舎まで戻ると、脇の方に入って来たメインの参道とは別に細い道があった。その道に沿うようにこれまた細い川が流れている。瑞葉は少し迷ったが、その川に沿って歩いて行った。

（面接に間に合うかな。でも、お店はすぐ近くだし大丈夫よね。そんなに広そうな神社にも思えないし）

道と呼んでいいのかわからないほど細い道の両側には、瑞葉の知らない木が奥の方まで生い茂っていて森のようになっていて。森はそのまま神社の裏にある山へと続いているらしかった。初夏の日差しは汗ばむほどだったが、木陰の下は驚くほど涼しく、今歩いている所だけがまるで切り離された別の空間のようだ。

瑞葉が歩いて行くと、やがて左手に小さな鳥居が現れた。そうとう古いようで所々朱がはげている。横には姫宮神社と書かれた札が立っていた。鳥居の向こうは土を固めて作っただけの階段が続いていて、段は山を登るようのにのびていた。瑞葉は少し立ち止まると、鳥居をくぐり進んで行った。

すぐに終わるだろうと思っていた道は、瑞葉の予想を裏切ってどこまでも続いていた。しばらくすると、瑞葉はだんだん不安になってきた。

こんなに広い神社だったのだろうか。歩けば歩くほど町から離れていくような気になる。途中でまったく人と出会わないことも瑞葉の不安を大きくさせた。

（入ってはいけない場所だったのかしら）

すると突然、歩いていて瑞葉の頬に一滴のしずくが落ちてきた。

見上げるとさっきまで晴れていた空一面に重たい雲が広がっていた。

「雨？うそでしょう」

やっぱり引き返そう。そう思ったとき、階段の先について終わる

が見えた。

やっとたどり着いたそこには小さな祠があった。薄暗い場所にひとりでいることもあって、その祠は何とはなしに不気味に感じる。とりあえずせっかくここまで来たのだから、と、瑞葉はお参りだけしてすぐに戻ろうと思った。祠の前にある賽銭箱に五円玉を入れて二礼二拍のあと一礼して、顔を上げたときだった。

視界が一瞬不自然に明るくなったかと思うと、隕石でも落ちたのかと思うほどの轟音になった。

「今のはなに？」

「雷だよ」

突然聞こえた声にぎょっとして瑞葉が振り向くと、瑞葉が登って来た階段とは反対側にある細い道の入り口に瑞葉と同じ年頃の少年が立っていた。

神隠し 2

「雷？」

やっこの思いで返した瑞葉のつぶやきを聞いて少年は頷いた。

「そう。この地は厳れる神の領分だから」

少し落ち着いてきた瑞葉はうさくさげに少年を眺めた。

少年はなんとも奇妙な格好をしていた。上下の白い服は瑞葉が見知っている和服とも言えず、上は着物のように着こなしているのだが、下にはズボンのようなものを履いている。顔の横で鬚を結び、首からは勾玉を連ねた首飾りをして、腰には太刀のようなものを差していた。

（まるでそう、弥生時代の人みたいだわ。日本史の教科書に載っていた……）

「あなたは誰？いつからそこにいたの」

さっきまで誰もいなかったのに――。

不信心から問い詰めるような口調になってしまったが、少年は瑞葉の態度などまるで気にする様子もなく答えた。

「ここへはついさっき呼ばれたから来た」

瑞葉が眉を寄せたことに気づいているのかいないのか、少年は戸惑う瑞葉にはお構いなしにしゃべり続けた。

「誰に呼ばれたのだろうと思ったのだけど、なるほどそういうことか。私は君を待っていたけれど、まさか本当に君が来るだなんて思わなかった。だって、君と最後に会ってからずいぶん長い時間がたった気がする」

まるで瑞葉の知り合いかのように話す少年のことを、もちろん瑞葉はまったく知らなかった。

気づけばいったん止んでいた雨が再び降りだしていた。ぽつり、ぽつりと雨粒が顔にあたるのを感じながら、この人はなんて淡泊に話す人だろう、と瑞葉は思った。表情や口調からは少年の感情を讀

み取することはまるでできなかった。

危ない人かもしれない。けれど少年も今いる場所もひどく現実味に欠けていて、瑞葉はまるで夢でも見ているかのような錯覚を覚えた。

「でも君が来てくれてよかった。これで私たちは帰ることができる」

「帰るってどこへ帰るの」

濡れた前髪が目にかかってうっとおしい。瑞葉は目を細めて少年を見つめた。

「私たちが帰る場所といえばただひとつ。大地を支える女神の国だ」
雨はますます強くなってきていた。

自分は一体何をしているのだろう。こんなずぶ濡れになってまでおかしな少年に付き合わずにさっさと帰った方がいいのではないか。そうだ、喫茶店の旦那さんと奥さんも瑞葉のことを気にかけているに違いない。面接の時間はとうに過ぎている。

しかし、そう思うのとは裏腹に体はその場から動こうとしなかった。

「じゃあ、私たちって」

言ったあとですぐに後悔した。瑞葉の本能が告げていた。これは聞くべきではなかった。

「もちろん、私と君のこと」

瑞葉ははじめかれたように背を向けると、もと来た道を走り出した。心臓が痛いくらいに鳴っている。あれは何だったのだろう。何と言っていた？

（女神の国？ 帰るですって）

瑞葉は後ろを振り返らずに階段を駆け下りた。しばらく行くと水の流れる音が聞こえた。境内を流れていた川だ。

（こんなに近かったかな）

行きはずいぶん歩いた気がしたが、初めて歩く道のため長く感じたのだろうか。

少し行くと、段の終わりが見えた。そこはさっき入ってきた鳥居

だった。

（こんなにきれいだったかしら）

よく見た訳ではなかったからいまいち自信はないが、鳥居全体に塗られた丹の色はもっと褪せていて、所々は上げていた気がする。しかし目の前の鳥居は鮮やかな朱色をしていた。

（まるで最近できたような――まさか、まさかね）

見上げると、空はますます暗くなっていた。

雨はもう本降りになっていて、遠くの空ではごろごろと低い音がしていた。

部屋の空気が動いたのを感じ、北野姫は顔を上げた。この部屋の主である自分に断らず入って来る人物はひとりしかいなかった。

「こんばんは、健。良い夜ですね」

健と呼ばれた少年はおもしろくなさそうな声を出した。

「いい夜なものか。外はひどい雨だぞ。この館に来るまでにずいぶんぬれたんだ。おまけに雷まで鳴ってくるし」

「良い夜ではないですか」

北野姫は微笑んだ。

「ここは雷の神をお祀り申し上げる社です。雷は神のお姿のひとつですよ」

健はいっそう顔をゆがめた。

「だが、あれは他所の雷だ。この地の雷はもうずっと長い間鳴っていない」

北野姫は気使うように健を見ていたが、突然体をこわばらせた。

「北野姫？」

異変に気づいた健が戸惑いながら姫を呼んだ。

北野姫はまだ固さの残った声で告げた。

「森の空気が変わりました。誰かがこの地を訪れた」

神隠し 3

瑞葉は道に迷っていた。

「どっちを向いても同じ景色。これはあれだ。迷子だ」

瑞葉はずっと考えないようにしていた事実をついに認めざるを得なかった。田舎育ちとは言え森を歩くことに慣れている訳でもない瑞葉が、雨が降り薄暗い中を歩き回って迷わないはずもなかった。

「どうしよう、むやみに歩き回らない方がいいのかな」

瑞葉としては、このまま自力で森から出られず警察に搜索されるなどという事態は避けたいところだった。しかしどちらに進めばいいかなんて、とうの昔にわからなくなっていた。

全身が雨でぬれているために体も冷え切っている。どうしてこんなことになったのだろう。

思い出すのはさっきの少年のことだった。

瑞葉のことを知っているかのような口調だったが、あんな奇妙な人をひと目でも見たならば絶対に覚えていた自信が瑞葉にはあった。それにも関わらずどれだけ記憶を巡らせても少年のことはちらりとも思い出せなかった。

「生まれて初めて変質者に会っちゃった。でももう会うこともないよね、それより早くここをでなくちゃ」

アルバイトはもう不採用決定だった。無理を聞いてもらって取り付けた約束だったが仕方ない。

（この森から出たら一番に謝りに行こう）

そう思ったとき、瑞葉の視界に何か赤いものが映った。

（何だろう）

不思議に思っただけで近づいてみると、それは燃えているように真っ赤な矢だった。瑞葉の腕ほどの長さの矢が大きな岩に深々と突き刺さっていた。

（なんてきれいなんだろう）

瑞葉は薄暗闇の中でもなぜかはつきりと見えるその矢に見入っていた。思わず手を伸ばした瑞葉の指先が矢に触れたとたん、ぱちんと音がしたかと思うと矢は跡形もなく消え去っていた。

「え？」

瑞葉は何が起こったのか分からずにさっきまで矢が刺さっていた場所をまじまじと見つめた。しかしどんなに瑞葉がいらんでも矢が再び現れることはなかった。

「うそ、どういうこと？」

「そこにいるのは誰だ」

突然声がして瑞葉が振り返ると、そこにはひとりの少年が立っていた。暗くて顔はよくわからなかったが、少年は瑞葉を見て驚いているようだった。

（さっきから会う人たちはどうしてみんな心臓に悪い現れ方をするのかしら）

瑞葉はややうんざりした気持ちになった。

「どうやってここへ入った？ここは普通の者は入れないんだ」

「この神社の人ですか？ごめんなさい、入ってはいけない場所だと知らなかったんです」

「話はあとで聞く。とりあえず早くここから出よう。俺について来て」

自分から聞いておきながら、と思ったが、瑞葉はやっと森から出られることにほっとした。

やはりこの森は一般人立ち入り禁止の森だったらしい。あまりきつく怒られないといいな、などと思いながら瑞葉は早足で歩く少年の後について行った。

森を出て館に着くと、少年は通りかかった女性に瑞葉を預けてどこかへ消えてしまった。女性は瑞葉についてくるように言い、今度

は彼女の後を歩いて行くことになった。

瑞葉は歩きながら前を歩く女性を眺めた。女性は瑞葉よりもひと回りほど年上のようなようだった。袖の長い白の衣を着ていて、赤い帯を前で結んでいた。

（神社の巫女さんかな。少し変わった格好だわ）

そうしているうちに女性はある部屋の前で立ち止まった。

「この部屋でお待ちくださいますよう。すぐに健さまがいらっしやいます」

そう言うのにこりと笑うと女性はどこかへ立ち去ってしまった。

残された瑞葉は仕方なく部屋へ入った。

その部屋はずいぶんと殺風景な部屋だった。置物などは一切なく、床の上に敷物すらなかった。

（やっぱり怒られるのかな。早く帰りたいのにな）

健とは誰だろう。この神社の神主だろうか。

思えば今日はおかしなことばかりが続いた。もう何が起きても驚かない自信が瑞葉にはあった。

しかし、部屋に入ってきた人物を見て瑞葉は驚きのあまりに固まった。

祠の前で出会ったおかしな少年が瑞葉の前に立っていた。

神隠し 4

瑞葉は部屋の入り口に立つ少年を見た。祠の前での出来事が思い出されて、正体の分からない不安が再びよみがえってきた。

瑞葉の様子を見て少年は口を開いた。

「さっきは無理やり連れて来て悪かった。詳しいことは後で話すが、あの場所は本当に危険なんだ。普通の人間が長くいていい場所じゃない」

瑞葉はぽかんとした。

「あなた——あなたは誰？」

すると少年はひとりで納得したようだった。

「森は暗かったから仕方ないか。俺は健。君をこの館まで連れてきたのは俺だよ」

瑞葉はびっくりした。

「でも、さっきの人は普通の格好をしていたわ」

森で会った人物はシャツにジーンズというごくありふれた格好だったが、今日の前に立っている健は、祠の前で出会った少年と同じような姿——教科書に載っている弥生人のような出で立ちだった。

「ぬれたから着替えたんだ。ごめんね、君にも着替えてもらったら良かったんだけど、すぐに帰れるのなら着替えないうままの方がいいかと思って」

ぬれた服のままの瑞葉に対して申し訳なさそうにする健に、瑞葉は首を横に振った。

「気にしないでください。入ってはいけない所に入った私が悪いんです。それに、あなたの言ったとおりすぐに帰りますから」

健は少し考え込む素振りを見せると言った。

「君の名前は何ていうの」

「私は瑞葉といます」

「それじゃあ瑞葉、君に会ってもらいたい人がいるんだ。その人の

いる所でいくつか君に聞きたいことがある。帰るのはその後でいいかな」

「ええ、構わないです」

やはりお説教は免れられないようだ。瑞葉には拒否権などないのだから健の言うことに従うほかなかった。

「じゃあ行こう。付いて来て」

瑞葉は促されるまま部屋を出て健の後を付いて行った。

健はどんどん歩いて行って、やがて館の裏側に出た。裏側は森が広がっていて、森の入り口には高床式の建物が建っていた。

健はその高床式の建物の方へと歩いて行った。建物の入り口は階段を昇ったところにあり、その両側に槍を持った男性がひとりずつ立っていた。

彼らは健が通ると頭を下げ、健はそれを見ることがもなく建物の中へと入って行った。

瑞葉は緊張しながら健に続いて行った。呼び止められないかとひやひやしたが、何事もなく中へと入ることができた。

建物の中はひとつの部屋になっていた。薄暗い部屋の奥には灯が灯してあり、その奥にひとりの女の人が座っていた。

「北野姫、瑞葉を連れてきた」

静かな部屋に健の声が響いた。瑞葉は健の隣に立って北野姫と呼ばれた人物を見た。

北野姫は瑞葉より三つ四つ年上のようだった。白い衣の下には赤い裳を履いていて、肩からは鮮やかな色の布を垂らしている。首には石を通した首飾りをいくつも連ねていた。

「よくぞいらっしゃいました。どうぞこちらへ」

瑞葉と健は北野姫のそばまで行くと、そこで腰を下ろした。

「瑞葉とおっしゃるんですね、わたくしは北野と申します」

北野姫は瑞葉に微笑んだ。瑞葉が男なら落ち着かなくなるような魅力的な笑顔だった。

「健にあなたを連れてくるよう頼んだのはわたくしです。ごめんなさい、突然驚いたでしょう」

瑞葉ははっとした。

「いいえ、私が勝手にあの森へ入ったのがいけないかったです。道に迷ってしまったて、いけないとは知らずに入ってしまったました」

北野姫は思案気に眉を寄せた。

「奇妙ですね。確かにあの森へ入ることは禁じられていますが、普通は入ろうとしても入れないものなのです」

瑞葉は目を瞬かせた。

「どういことですか」

「あの森は普通の森ではありません。雷の神が住まう森なのです。

普通の人は雷の神のお力によって入ることはおろか近づくこともできません」

「雷の神の力？」

「ここは、パワースポットのひとつだということだろうか。

「先にひとつ言っておかなければいけないことがある」

「それまで黙っていた健が唐突に口を開いた。

「瑞葉、ここは君が思っている世界じゃないんだ」

「え？」

瑞葉は健を見た。

「ここは、君がいた時代のはるか昔の時代。まだ神々がこの地にいた頃の日本だ」

神隠し 5

瑞葉は、健の言ったことを理解するのにたっぷりと時間を使った。

「昔の日本？」

瑞葉が繰り返すと健はうなずいた。

「そう。不思議には思わなかった？ここで会う人たちみんな変わった格好をしていただろう」

瑞葉は納得しなくなって言った。

「それは、ここが神社だからだと思っていました。それに、健はさつきまでシャツとジーンズ姿だったじゃないの」

「それは俺も君と同じ、平成の日本からここへ来ているからだよ」「え？」

瑞葉は目を瞬いた。

「それにしては、やけに冷静ね」

健は苦笑いを浮かべた。

「俺はもう何度もここへ来ているからね。初めての瑞葉と比べれば冷静だよ」

瑞葉は健をじっと見つめた。健も瑞葉を見返してきた。

健の様子は嘘を言っているようには思えなかった。

瑞葉は小さく息を吐いた。

「ここが元いた時代とは違う日本だということにはわかったわ。でも、一体どうしてこんなことが起きたの？私はただ神社でお参りしただけよ」

健は困った顔をした。

「俺たちもそれを君に聞きたかったんだ。今まで未来からやって来た人間は俺だけでほかはひとりもいなかった。俺にはここへ来る歴とした理由があるけれど、瑞葉は本当に何も心当たりがないの」

「そして、なぜあの森にいたかもです」

それまで黙って話を聞いていた北野姫が口を開いた。

「先ほども申しましたが、あの森は神の住まう森。生身の人間が入ろうものなら無事では済まされないのです」

瑞葉は申し訳なくなつて目を伏せた。

「ごめんなさい。私、本当にわからないんです。神社でお参りをしたあと境内を散策していたら、知らない間に森で迷つてしまつていて。そして岩の前で健に見つけられたんです」

「岩の前？」

聞き返した健に瑞葉はうなずいた。

「ええ、大きな岩の前よ。そういえばあの森が神様の森だつていうのは少しわかる気がする。私がその岩の場所へ行つたとき岩にきれいな矢が刺さつていたのだけど、ほんの一瞬のうちに消えてしまつたの。見間違ひかと思つていたけど、神様の森なら不思議なことが起こつてもおかしくないわね」

健と北野姫は黙つて瑞葉の話を聞いていたが、やがて健が言った。

「それは本当か？」

真剣な健の顔に瑞葉はたじろぎながら答えた。

「ええ。燃えるように真っ赤な矢で矢羽は白い羽だった。岩に刺さつていた場所には穴が残つていたわ」

「俺が瑞葉を見つけたとき、矢なんてなかった」

健が信じられない様子で言った。

「その矢はこの地の雷神だ。俺はずっとそいつを探していたんだ。本当に見たんだな？」

今にも館を飛び出して行きそうな様子の健に、瑞葉は慌てて言った。

「でも、矢はなくなつてしまつたわ。私が触つた瞬間に消えてしまつたの」

「触つた？」

健は素っ頓狂な声をあげた。

「雷に触つただつて？それで君は何ともなかったの」

「だつて一瞬だったもの」

瑞葉は気まずげに目をそらした。健の言い方にもひっかかるものがあつた。

（何よ、丸焦げにでもなっていたらよかつたっていうの）

そのとき、黙っていた北野姫の笑い声がした。瑞葉と健は北野姫の方を見た。

「どうやら、瑞葉は雷の大君がこの地へ呼んだようですね」

「そうみたいだな」

うなづく健に瑞葉は首を傾げた。

「どうということ？」

北野姫は柔らかく微笑むと言つた。

「雷の大君はこの森に住まう神。わたくしは大君にお仕えする巫女なのです。この地の民は古より大君をお祀りしてきました。しかし、あるとき突然大君はこの地より姿をお隠しになつてしまわれたのです」

北野姫は悲しげに笑つて続けた。

「瑞葉は赤い矢を見たと言いましたね。その矢こそが大君自身なのです。しかし、矢はもうずっとこの森にはありません。そして瑞葉は矢に触れたと言つた。そのようなことを成せるのは、瑞葉が大君のお導きでこの地に來たからでしょう」

葵 1

翌朝は昨夜の雨が嘘のような晴天だった。

瑞葉は宛がわれた部屋から廊下へと出ると、眠りにつく前と変わらない景色を見てこれが夢ではないことを実感した。

昨夜は、ここが昔の日本だということ、瑞葉がタイムスリップしたのはこの地の雷神によるものらしいことを聞くと、夜も更けてきたためその場は解散となった。

そして瑞葉は最初に通された部屋に戻り、そこで一夜を明かすことになった。すぐに帰るつもりでいた瑞葉は困惑した。

（そういえば、どうやって帰るか聞くの忘れちゃった。でも健はここと現代を行き来しているんだもの、方法はあるはずよね）

瑞葉は廊下の端に立ってぼんやりと外を眺めた。部屋は中庭に面していて、廊下にでると目の前には大きな池が見えた。池の向こうは茂みになっていて、さらにその向こうには北野姫と会った館と雷神の森がある。

今日は北野姫と森へ行くことになっていた。瑞葉が見た赤い矢はずっと昔になくなったこの地の雷神の姿であり、雷神を祀る巫女の北野姫は自分も森へ入って確かめると言い出したのだった。

（北野姫は森に入ることができるのね。それは彼女が巫女だからとして、それじゃあ健はなぜ森に入ることができたんだろう）

瑞葉は健と雷神の森の中で出会った。北野姫は森には普通の人間が入ることはできないと言っていた。瑞葉が森に入れたのは、雷神自身が瑞葉を呼んだかららしい。健も何か理由があるのだろうか。

「花と話でもしているの」

近くから聞こえた声に振り返ると、健が隣に立っていた。瑞葉がさっきまで眺めていた方を見ている。

「おはよう、健。私は花と会話なんてできないわ。ただ、眺めていたの」

「そう？あんまり熱心に見ていたからさ」

「少し考えていたの。今日、北野姫と森へ行くの」

「知っている」

健が続きを待つようにこちらを見ていることに気が付いたが、庭を見たまま瑞葉は言った。

「確か森は普通の人が入ってはいけなかったわね」

「ああ、そうだ」

「私、あなたに会う前にもあの森で人に会ったわ」

隣で健が息を飲む気配がしたが瑞葉は続けた。

「あなたによく似た人よ。最初は同じ人だっと思った。でもよく見たら髪型が違ったの。その人、私を待っていたんですって。女神の国へ帰ろうと言われたわ」

瑞葉はゆっくりと健の方を見た。健は考えの読めない顔で瑞葉を見つめていた。が、やがて口を開いた。

「それは尊だ」

「尊？」

「いや、わからない。それは確かに尊だったのか」

「わからないわよ。私は尊が誰だか知らないのに」

健は気まずそうに眉を下げた。

「そうだった。すまない、それくらい驚いたってことだ。尊はつまり俺の弟なんだ」

瑞葉は数度瞬きをした。

「弟？」

「ああ、俺に似ているやつだったならたぶんそうだ。そして俺が探している雷神でもある」

瑞葉は驚いた。

「雷神は矢ではなかったの？」

「神に姿形なんてないさ。稀に人間の前に現れるときに、人間にも見ることができるような形を取ることがあるんだ。尊の場合、それが矢だったり人の姿だったりする」

瑞葉は茫然としてつぶやいた。

「じゃあ、本当に彼が雷神で健の弟なのね」

「とは言え、俺が尊の兄だったのはずいぶん昔のことだけど。正確には、尊の兄の魂を持って生まれたのが俺なんだ」

瑞葉は混乱して頭を押さえた。

「ええと、雷神のお兄さんということは健も神様なの？」

「俺は人間だよ。その昔、どこか遠い地からやって来た雷神とこの地に暮らしていた人間の娘の間にできたのが俺と尊ってわけだ。尊は神の血をひき、俺は人間の血をひいた。人間の俺には尊と違って寿命があるから、何度も生まれては死んでいるけど。そして今生きているのが俺だ。生まれ変わりと云っても俺は普通の人間だから当時の記憶なんてないし、全部尊から聞いた話だけだね」

話ながら健は普段の調子に戻っていた。瑞葉は何とか理解しようと必死になっていたので、

「矢といい、尊といい、瑞葉には本当に驚かされるな」

と健が言ったとき、驚いたのはこちらだ、とは思うだけで口にはしなかった。

葵 2

瑞葉と健は北野姫の元へと向かった。そもそも健が瑞葉の部屋を訪れたのは北野姫の館へと瑞葉を連れて行くためだった。ふたりは昨日と同じ廊下を通って進んで行った。

瑞葉は歩きながら健とのさっきの会話を思い出していた。

（祠の前で会った人が神様だったなんて。健は神様のお兄さんだから神様の森に入れるんだ。あのとき尊は女神の国へ帰ろうと言っていた。この世界のどこかに女神の国があるのかな）

「ここで瑞葉は健と出会ったのですね」

瑞葉と北姫は雷神の森へと来ていた。雷神の巫女である北姫は森に入ることができるようだった。

確かめるようにこちらを見た北姫にうなずくと、瑞葉は答えた。

「それから、この岩に赤い矢が刺さっていたんです」

瑞葉の視線を追って北姫は草が少なくなっている場所にある岩に目を向けた。

岩は瑞葉が寝ころべるほどの大きさがあり、裏側へ回ると小さな丸い穴が開いているのがわかった。

「やっぱり矢はありませんね」

瑞葉は肩落とした。

「ごめんなさい。私のせいで矢がなくなってしまった」

「いいえ、瑞葉のせいではありません。あの矢はもうずっと昔に失われているのです」

でも、確かに瑞葉は見たのだ。燃えるような赤い色の篋の先には白い矢羽が付いていてとても美しい矢だった。

しかし、今日の前にある岩には矢は刺さっておらず、ここに来れ

ば雷神につながる手がかりが何かあるだろうと思っていた瑞葉はがっかりした。

「そういえば、この近くに祠が建っていませんか？」

「祠ですか？」

「はい。昨日ここで健と会う前に、祠の前で健とよく似た人にあったんです。健に話したら、その人は尊だって言うんです」

瑞葉は今朝健と話した内容を思い出していた。尊がこの森の雷神だというのなら、尊と会った祠にも行ってみる価値はあるだろうし、北姫もまた同意見だろうと思った。

北姫はしばらくの沈黙のあと、わずかに表情を硬くして言った。

「祠は確かにあります。この道を少し下ったところに、鏡を祀っているのです」

「鏡を？」

「昔、水の女神がこの地を訪れた時に落とした鏡です。鏡とは言え女神の持ち物ですので、こうしてお祀りしているのです。ですがそれだけです。わたくしは大君と祠に何かつながりがあるとは思いません。祠へ行く必要はないでしょう」

北姫の声は感情のこもらないもので、どこか冷ややかな口調だった。

「瑞葉が大君と会ったのは、瑞葉をこの地へ呼んだのが大君のご意思であるということでしょう。ですからわたくしは、これで長らく不在だった大君の行方も何か分かるのでは、と思っているのです」

部屋に戻ると中には健がいた。

「どうして一緒に来てくれなかったの。あなたも森へ行くものだと思っていたのに」

顔をあわせるなり突っかかってくる瑞葉を気にした様子もなく健は答えた。

「なんだ、そんなに瑞葉に好かれていたとは思わなかった」

「ふざけるのは止して。北姫とふたりですっごく気まづくなったのよ」

途中までは普通だったのだ。それが瑞葉が祠の話をした途端に北姫の様子が変わった。そして帰りの道ではどちらも必要以上に口を開くことはなかったのだった。

健はおもしろそうに片方の眉をあげた。

「へえ。あの北姫のポーカーフェイスを崩すだなんて、瑞葉もなかなかやるんだな」

「おもしろがらないでったら。そういう健は一体何をしていたのよ」

「そう怒るなって。俺だってやることがあったんだよ」

「なあに、やることって」

「まだ秘密。それより瑞葉はこれからどうするの」

健は突然まじめな顔をして瑞葉を見た。瑞葉も姿勢を正して健を見返した。

「もちろん、元の時代に帰りたい。北姫は私に何か期待しているようだけど、それは買い被りだわ。私には何もできないもの。健は何度もあちらとこちらを行き来しているのだから、私だって帰れるのでしょうか？」

「それはできないんだ」

健はすまなそうに目を伏せた。

「俺は北野姫に呼ばれてここへ来たんだ。いなくなった雷神を探してほしいからと。だから元の時代に帰るときも北野姫の力で帰してもらっていた。誰かがその意志で人を呼んだなら、元の場所に戻るときもその人の意志で成さなければいけないからね。瑞葉がもっていた時代に帰るには尊に頼むしか方法がないんだ」

「そんな」

瑞葉は茫然とした。

「だって、尊はどこにいるかわからないんでしょ」

震える声でそう言うのがやっとだった。声だけでなく体も震えて

いたが瑞葉は気付かなかった。

「だから、俺がいるんだ」

そう言うとな健は瑞葉の手を握った。氷のように冷たい手だった。

「俺は必ず尊を見つけてこの地へと戻す。だから、瑞葉にも協力して欲しいんだ」

「協力？」

健は瑞葉を落ち着かせるように大きくうなずいてみせた。

「ああ。瑞葉は尊が直々にこの地に呼んだ。こんなことって今までなかったんだ。きっと、瑞葉なら尊を探すことができると思う」

瑞葉は身じろいだ。

「そんなこと言われたって、私は何もできない。私は健のように神様の血をひく訳でもなければ北姫のような巫女でもない。普通の人間なのに」

「俺だってそうだ。過去はどうであれ、今は普通の人間だよ。だから誰かの協力が必要なんだ。危険なことがあったら必ず瑞葉を守りし、尊が見つかるまで俺も元の時代に帰らない。どうか俺と一緒に尊を探すのを手伝って欲しい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4313w/>

MI・ZU・HA

2011年11月14日03時22分発行